

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370821

研究課題名(和文)イランにおける「近代性」の意味変容と「国民」の創生

研究課題名(英文)Transformation of 'Modernity' and Creation of 'Nation' in Iran

研究代表者

黒田 卓 (KURODA, TAKASHI)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：70195593

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イランを現在の国民国家としてより、広域な文化圏として捉えつつ、18世紀後半より始動する「近代性」との邂逅が、19世紀に入っていくかに咀嚼・解釈され、そして国内外からの支配に対抗する拠り所へと変容していったかを、イランの国境外で活躍した3人の人物に光を当てることで、解明することを主な目的とした。その結果、初期のムスリム知識人たちは西欧に起源する「近代性」が生み出す科学技術的成果は評価する一方で、文化的な矜持を保持しようとしたこと、及び時代が進むにつれ政治主体としての「国民」がとくに専制的「王朝権力」と対比するかたちで創生されていったことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Considering Iran in the broad sense (or as Persianate region) rather than Iran as a present nation-state, this project aims to explore how understanding and recognition of Persianate intellectuals' encounter with 'Modernity' was interpreted and transformed into coceptions of resistances against the domestic and foreign rule by focusing on the typical figures active outside of the borders. As a result of the investigaion, I could conclude that the early Muslim intellectuals had ambivalent attitudes toward 'Modernity' and 'Nation' was gradually created as a political actor in contrast to despotic 'Dynastic State'.

研究分野：人文学

キーワード：東洋史 西アジア史 イラン近代史 比較交流史

1. 研究開始当初の背景

(1) 1979年のイラン・イスラーム革命より30年以上が経過し、政治的な変動に絶えず見舞われながらもイスラーム統治体制は今なお健在であり、その支配の正統性を根拠づける歴史観には公式上イスラーム主義が依然として据えられたままである。同革命が現実政治の上でも理念の上でも拒絶したパフラヴィー朝時代の歴史イデオロギーたるイラン民族中心主義を、あるいはそれとは思想的に同調しつつも対抗的なスタンスを取った民衆的な民族主義をととも解体しながら、イラン近現代のイデオロギー的主流にシーア派(12イマーム派)の高位モジュタヘドとその指導的な役回りを再配置することで、19世紀ガージャール朝専制政治を根底的に批判し、20世紀初頭の立憲革命によりそれをイスラーム的「公正」に導いた立役者に正統派ウラマーを仕立て、またパフラヴィー朝の世俗的・自民族中心主義的な強権支配に抗して民衆を率いてきた指導者として彼らを描き直す立場が支配的となった。

こうしてイスラーム主義を基軸とした歴史修正主義がイランの歴史学界を席卷するかに見えたが、実は今世紀に入ってからウラマー階層の中でも正統的なモジュタヘドよりも、より民衆に近い目線を共有していた宗教的な「異議申し立て者」や、より世俗的な政治家・官僚や商人に焦点を当て、下からの民族主義的な歴史叙述を目指す流れも息を吹き返しており、また他方で社会民主主義的な運動を再評価する動きも目立つようになってきた。とりわけ百周年を経た立憲革命の評価をめくって、海外のイラン近代史研究のみならずイラン国内においても多様な研究が展開され始めたことは刮目すべきであり、本研究も近年のこうした研究動向を背景に構想された。

(2) エドワード・サイード亡き後、コロンビア大学で彼の衣鉢を継いで比較文学やイラン研究に精力的に発言を続けるハミード・ダバーシーは、近年発刊した、故国の近現代史読み直しに果敢に挑戦した意欲作 *Iran: A People Interrupted*, New York, 2007 (邦訳『イラン、背反する民の歴史』作品社、2008)において、そもそもイランの近現代を彩る思想潮流は決して単一的でも単線的でもなく、総体として言えば、(シーア派)イスラーム主義、ナショナリズム、そして社会主義が各々のバリエーションをそのうちに抱えながら互いに拮抗・競合し合うとともに交雑もする、きわめてハイブリッドでダイナミックなものであったし、今もあると主張している。また、彼はイラン近代史が異種の思想の絡み合いを伴って展開してきたのみならず、そうした思想状況が国境を越えて形成されてきた点にも注目している。

トロント大学で歴史学の教鞭を執るタヴァッコリー・タルギーもまた、「伝統」/「近

代」の二項対立にからみ取られたポストコロニアルな歴史学の苦境から脱却する意味で、一国主義的な歴史叙述ではなく、むしろイランやインドという国民国家の枠外で忘却されてきた「故国なきテキスト」(homeless texts)に着目し、それらがいかにか「故国あるテキスト」へと転換していくのかというメカニズムとプロセスにも考察を加えている。ペルシア語を核とする広域の文化的圏域(Persianate region)が国境の画定に伴い、またそれとともに「古代ペルシアの栄光」の再認識とペルシア語の俗語化・規範化により国境線の枠内で民族主義的意識が知識人層に浸透し、ネイションなる「想像の共同体」が実体化してゆくさまを具に検討している(M. Tavakoli-Targhi, *Refashioning Iran: Orientalism, Occidentalism and Historiography*, London, 2001)。

上述のポストコロニアルな歴史叙述の在り方を探求する2人のイラン出身の代表的論客の議論に触発され、これまでの実証研究を俯瞰的な立ち位置で見直そうというのが本研究の動機となっている。

2. 研究の目的

(1) 研究代表者は、2010年より3年間にわたって科学研究費補助金による研究課題「イランにおける「近代性」との邂逅の現場」において、18世紀以降に西欧に起源する「近代性」(Modernity)とイラン及び広い意味でのペルシア語文化圏の知識人との邂逅の現場がどのようなものであったかを、旅行記などのペルシア語テキストの解読を通してその内実の解明に努めた。上記の研究動向に加えて、前記研究課題で得た知見やアイデアを踏まえて、今回の研究の主たる目的を次のように設定した。

すなわち、広義のイランにおける「近代性」との邂逅の位相が、イラン独自の歴史的文脈の中でいかに咀嚼され解釈され、そしてロシアやイギリスの進出と、ガージャール朝専制支配への「対抗の拠り所」へと意味変容していったか、それを国境の外の地域で活躍したにもかかわらずイランの先述の主要な思想潮流の先駆者になったと言える3人の人物に焦点を定めながら、いわば三点観測していくことを通して探究を試みるということであった。

(2) 上述の3つの地域と3人の人物とは以下の通りである。

インド在住イラン家系出自文人官僚

前回の科学研究費補助金課題とも一部重複するところもあるが、この分野を掘り下げると予想を超える多量のテキストが存在し(しかもほとんどは写本の形態で)、未解明な部分も多く残されており、加えて研究があったとしても植民地インドと宗主国イギリスの二者関係で自己完結する研究が(ポストコロニアルを標榜しているにもかかわらず、

つまりはかけ声倒れでペルシア語テキストさえ参照せずに)大半であることが判明した。そこでここでは、アワド地方ラクナウ出身のミールザー・アブー・ターレブ・ハーン(1752-1806)を本項の代表的な人物とし、その浩瀚な旅行記を主に取り上げ、併せてその前後のその他のイラン系文人官僚の作品やイラン人外交官・使節などの記録との比較検討も含めテキスト分析を進める。

イスタンブル在住イラン人コミュニティ

このコミュニティはオスマン帝国の帝都イスタンブルに居住し貿易に携わっていた商人グループが主な構成員であった。そのコミュニティのイデオログとして最も著名なのがアーカー・ハーン・ケルマーニー(1854-96)で、アフマド・ルーヒーと並んでペルシア語在外新聞『アフタル』(1876年創刊)の編集に携わり、種々の文化・政治活動に関与した。しかしここでは最初期のペルシア語文法書を著し、ヨーロッパの近代小説のペルシア語翻訳を介してペルシア語の平易化・規範化に寄与したミールザー・ハビーブ・エスファハーニー(1835-93)に主にスポットを当てる。

ザカフカース出身のイラン社会民主主義革命家

2度の対ロシア戦争での敗北の結果、ロシア領となったザカフカース(南コーカサス)地方は元イラン属領であり、ロシア植民地統治下でもアーホンドザーデ(1812-78)のようなペルシア語・ペルシア文学に精通した優れた思想家を輩出していた。こうした系譜の上に、ロシアのラディカルな人民主義や社会民主主義がとりわけアゼルバイジャン系の知識人に影響を及ぼし、アミン・ラスールザーデのような社会主義ジャーナリスト(後に民族主義リーダーへ転身)も生み出した。ここではラスールザーデほど高名ではないが、イランの20世紀初頭の政治的激動にも関わったヘイダル・ハーン(1880-1921)を取り上げ、彼の生涯や断片的な記事からイランの初期社会民主主義思想と運動の一断面を考察する。

3. 研究の方法

(1) 3年の研究期間の初年度には、18世紀後半から19世紀20年代ぐらいまで、地域的にはインド北東部のイギリス東インド会社が直接植民地支配下に置いたベンガル、ビハール、オリッサ、及び間接的支配が及びつつあったアワドなどに、そして人物としてはミールザー・アブー・ターレブ・ハーンに焦点を絞りたい。前回の科学研究費補助金課題において、研究代表者は当該期のペルシア語旅行記や地理書などのテキスト、関連する研究文献、イランで同じ時期に作成された外交官や留学生の旅行記録などを重点的に収集し、その多くについて丹念に読解を進め、訳文も作成した。その結果以下のような重要なポイントが見えてきた。

アブー・ターレブ・ハーンのヨーロッパ旅行記『求道者の旅路』(略称 *Masīr-e Talebi*, 1806年に成稿)は決して孤立した作品ではなく、その前後に類似の旅行記(一部地理書を含む)作品が存在し、それらのテキストの作者のほとんどがイラン家系出自のムスリム文人官僚でイギリスとの協力関係に入ったというバックグラウンドを共有すること。

旅行記作品は各々作者の歴史的事情・個人的な体験を反映したものであるが、それらには共通する特色も見出せること。つまり、植民地主義初期という時代背景下で、ヨーロッパの優れた発明品や施設には賛嘆するものの、彼らのアイデンティティに深く関わるジェンダー規範やイスラームの教義・儀礼などの側面では強い矜持を保ち、むしろイギリス人に対し文化的に優位に立っているとの認識も一部には見られる。

従前の研究はしかし、もっぱらインドという枠組みを自明視し、その上でイギリスとの関係を考える傾向があり、テキスト読解の面でももっぱらポストコロニアル批評に触れそうな部分にのみ視線注がれるきらいがあること。

以上のごときポイントを念頭に置いて、この年度にはまず『求道者の旅路』の分析作業を基軸に進める。その際に留意すべき点として以下のことを考慮する。

インドという地への思い入れは確かに作者にはあるが、同時に彼が序文でも述べるように本書をムスリム全体に対して発信しているという事実は軽視すべきではないだろう。ペルシア語で書かれていることを考えれば、彼の父祖の地イランをはじめ広くペルシア語文化圏域が彼の念頭にあったと見なすべきだろう(この点で一般に頻用される本書英訳本を使用している大半の研究者の解釈や読解は、英訳者の誤解や原文がもつ微妙なニュアンスを吟味していないように思える)。

もっぱら注目を集めるイギリスだけでなく、作者が帰路に通ったフランス、地中海世界、オスマン帝国での観察、及び英仏対立とナポレオン・ボナパルトの台頭と対外戦争の記述にも目を向けるべきである。さらに、ペルシア語旅行記という観点からは、作品前後のインドとイランの旅行記作品系列との比較の方法も有効であろう。

2年度以降の課題となる、植民地主義が本格始動する19世紀中葉以降との関連性を勘案すれば、民族認識と政治・社会観のありよう(中でも法治主義と議会制)も不可欠の着眼点である。

(2) 2年目以降の研究計画・方法は次のように想定していた。まず2年度は時代的には19世紀半ばから後半にかけて、地域的にはオスマン帝国首都イスタンブルとイラン本国、及び両地域間のネットワークを、さらに人物としては、ミールザー・ハビーブ・エスファハーニーを主に取り上げることにする。研究の

方法として必要な項目を列挙すると以下のようになる。

イスタンブルにおけるイラン人コミュニティの形成、とりわけサアダト・アンジョマンと呼ばれる同郷組織の設立をめぐる経緯や背景の解明。

こうしたイラン人コミュニティに属する急進的思想家で著述家のミールザー・アーカー・ハーン・ケルマーニーとその同志アフマド・ルーヒーの活動の軌跡を追い、とくに著名なアーカー・ハーン・ケルマーニーについてはその思想の大枠を理解すべく信頼に足る研究にあたる。例えば、Ferūdūn Ādamiyat, *Andishe-hā-ye Āqā Khān Kermānī*, Tehrān, 1357 Kh. (2nd ed.)。

ハبيب・エスファハーニーの生涯や経歴をまずは整理をする。ただしこの人物に関しては、確実な情報が乏しいので、イスタンブルでの文書館・図書館での調査が必要である。彼の名をイラン近代文学史上不朽にしたのは、ジェームズ・モーリアが1824年に上梓したイランを舞台とするピカレスク小説『ハジ・ババの冒険』を、19世紀末にペルシア語翻訳し20世紀初めそれがカルカッタで刊行され、それが来る立憲革命の思想的触媒の一つになったということである。しかし彼はこの訳本を作る前に、ペルシア語教育の実践に携わり、その経験から文法書を何点か、またそれを文学作品で実験すべくモリエールの『人間嫌い』の翻訳を行ったり、ヨーロッパの演劇論を『アフタル』紙に寄稿したりしている。ペルシア語のイラン的な規範化という文脈で、彼の一連の作品を評価する視点に立って研究を進める。

3年目、つまり最終年度の計画は、主にザカフカースで活動した社会民主主義者たち、とくにヘイダル・ハーンについて経歴や思想をまとめることとしていた。すでに研究代表者は彼に関する論考を2篇発表しているが、今回は新しい視点として、ラスールザーデの立憲革命に関する記事分析、いわゆるギーラーン革命(1920-21)の最終段階でヘイダルが目指していたことを、彼の側近であったスミルノフの覚書(未入手だが、ロシア国立政治社会運動史文書館に所蔵を確認)を使って明らかにすることを重視する。

4. 研究成果

(1) 以上のような研究目的を設定し、比較的詳細な研究計画・方法を策定していたが、これらを構想していた時点ではまったく予期さえしていなかった、研究代表者が所属研究科の研究科長に選出され、その職務に専念せざるを得ないという事態が生じた。加えて、研究科長職任期が2年であるため、最終年度で立て直しを企図していたが、同職への再任となりさらに2年の任期を全うすることが必要となった。そのため職責上の理由により、本研究課題で想定していたエフォート率を下げざるを得ず、また予定していたトルコや

ロシアへの資料調査のための出張も軒並み見送ることを余儀なくされた。

こうした事態の変化に直面して、研究の効果と完成度を熟慮して、研究目的の(2)に掲げた「イスタンブル在住イラン人コミュニティ」のサブテーマを割愛し、むしろの「インド在住イラン家系出自文人官僚」に注力し、部分的にはの「ザカフカース出身のイラン社会民主主義革命家」について今までの研究蓄積を活かして補完的な作業を行うことへと計画を見直した。こうして見直した研究方針に沿って、各年度で次のような研究成果を得ることができた。

(2)初年度には、文部科学省共同利用研究・共同研究拠点事業共同研究課題「旅行記史料が結ぶ近世アジアとムスリムの世界観」研究会の招請により、「インド在住イラン系ムスリム官僚ミールザー・アブー・ターレブ・ハーン(1753~1806)の訪欧旅行記をめぐって」と題する招待講演を行った。この講演の中で、旅行記『求道者の旅路』が成立した事情や歴史的背景、執筆動機をはじめ、全体の記述を新奇な発明物、慣習・文化の比較、政治社会制度、オスマン帝国の政治・文化論の4つの分野に分類して考察を加えた。もとより進めてきた研究成果を体系的に整理して説明することを主眼としていたが、とくにあまり顧みられることなかった新しい知見として、この旅行記執筆意図がインド在住者のみを対象にしたものではなく、イスラーム圏全体の知識人に向けて啓蒙者たらんとするも、ムスリム・エリート層の現状を見ると絶望感を抱かざるを得ないというところにあったこと、及びもっぱらイギリスにおける記述のみが脚光を浴びてきたこの旅行記には、オスマン帝国の社会・文化批評を合わせて読むことによって立体的に読者に訴求する工夫が凝らされていること、そしてヨーロッパの進んだ技術・製品・政治社会制度は一定の評価をするものの、宗教・文化の根幹に関わる側面については自文化への強い矜持が認められること、などが指摘できる。

次に、当初計画の最終年度のサブテーマにより深く関係するが、ロシア領ザカフカースとの思想交流も一因となって20世紀初めに、カスピ海南西岸ギーラーン地方で展開されたジャンギャリー運動に関して、この地方の文化人類学的研究で知られるフランス・プロヴァンス大学のクリスチアン・ブロンベルジェ教授による講演への凡そ半時間にわたる詳細なコメントと討論を英語で行った。ブロンベルジェ教授が同運動発生のエコロジカルな因子に着目されたのに対し、研究代表者はむしろこの地方における立憲革命以来の政治的・経済的な文脈に注目すべきであると強調した。また、氏がこの講演でとくに取り上げられたラトビア人女性コムにストにしてイラン共産党(ポリシェヴィキ派)中央委員会初代書記であったミルダ・ブツレに関し

て、彼女にまつわるエピソードなどをロシア語文書の記述より紹介するとともに、彼女が率いた同党内左派と対抗したヘイダル・ハーンの経歴や政治的立場についても詳しく説明を加えた。その後、同氏及びフロアを交えて活発な議論が行われた。

次年度には、所属研究科の研究科長裁量経費によるプロジェクト研究会において、「インド在住イラン系文人アブー・ターレブ・ハーンがみた英仏戦争」と題する研究発表を行った。旅行記の英仏比較論に関する記述に基づき、ヨーロッパの政体分類とフランス革命への視線、ナポレオンの台頭とエジプト遠征、第4次マイソール戦争とティーブー・スルターンの壮絶な死、などを詳論し、ムスリムが目撃も含めて観察した、おそらく唯一無二の、ヨーロッパ大変動期の記録に表れる特徴を炙り出した。

最終年度には、東北大学の広報活動の一環ではあるが、大学の研究、とりわけ積み重ねてきたインド在住イラン系ムスリム文人層の「近代性」認識の研究を広く社会に発信する目的で、「ムスリムたちの近代との出会い」というタイトルでイスラーム圏やイランにおけるムスリム知識人の旅行記にみられる愛憎半ばする西欧「近代」理解のあり方を俯瞰的な論考としてまとめた。これは英語にも翻訳され、『*Tohoku University Annual Review 2015*』(Tohoku University Public Relations Division, 2016), pp. 20-21 に”Muslims’ Encounter with Modernity”という標題で掲載されている。さらに、平成27年10月にイタリアのフィレンツェ大学で開催された日本学の国際シンポジウム’How to Learn: Nippon/Japan as Object/Japan as Method’において、クロージング・リマークスを行い、アブー・ターレブ・ハーンのイタリア滞在期の観察にも言及し、これを例にアイデンティティと客観的な対象性の問題を英語で提起した。

研究期間を通して、所期の目標にあった三点観測やそれに基づく学術性の高い論考を作成できなかったとはいえ、今後の研究の基盤整備としてイラン近代史に関する、ペルシア語及び欧米語による資料や文献を多数収集すると同時に、ミールザー・アブー・ターレブ・ハーンをはじめとするインド在住ムスリム文人の認識・表象については、相当の知見を蓄えることができ、近い将来に論考などのかたちで成果を発信できるものと期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

黒田 卓、ムスリムたちの近代との出会い、まなびの杜、査読無、72号、2015、pp. 3-4

〔学会発表〕(計3件)

黒田 卓、Some Remarks on Prof. Christian Bromberger’s Lecture “The Jangali Networks: Localism and Internationalism in Gilan Revolutionary Movement (1915-1921)”, 羽田記念館特別講演会、2013年12月15日、京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター

黒田 卓、インド在住ムスリム官僚ミールザー・アブー・ターレブ・ハーン(1753~1806)の訪欧旅行をめぐって、文部科学省共同利用研究・共同研究拠点共同研究課題「旅行記史料が結ぶ近世アジアとムスリムの世界像」第2回研究会、2014年2月23日、東京大学法文1号館

黒田 卓、インド在住イラン系文人アブー・ターレブ・ハーンがみた英仏戦争、東北大学大学院国際文化研究科科長裁量経費による「中東表象」研究プロジェクト研究会、2014年11月26日、東北大学国際文化研究科

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田 卓 (KURODA TAKASHI)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：70195593

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：